

鹿児島の植物⑧

アキノタムラソウ (シソ科)

植物担当 大屋 哲

植物を勉強し始めた頃に、「シソ科の植物の特徴の一つは、茎の断面が四角形をしていること。」と教えてもらいました。アキノタムラソウも茎の断面が四角形です。シソ科で



花壇によく植えられるサルビアと同じ仲間なのです。その証拠に学名はSalvia japonica (日本のサルビアという意味)です。

「アキ」という名がつくので、一般的に、紅葉の時期に花を咲かせるのかと思いがちですが、6月～9月頃、茎の先のほうに青紫色の花をたくさんつけます。県本土では道沿いなどで普通に見られる植物です。

また、南薩には茎の根元から地表をほう茎をだし、その茎の節から根が出るタイプの記録があります。他地区には分布していないのか、根以外に何か特徴があるのか、アキノタムラソウを見つけては、観察しているところです。

鹿児島の火山① 爆発的噴火をくりかえす桜島火山

地質担当 前田 利久

桜島火山は日本を代表する活火山で、現在でもさかんに噴火をくりかえしています。

現在の活動は、南岳からの山頂噴火が中心で、山頂火口から半径2km以内は立ち入り禁止になっています。ところが、2006年6月からは南岳東斜面の昭和火口から噴煙が上がりはじめ、立ち入り禁止区域が広がりました。

桜島火山の噴火史は、地形発達からみて古期北岳、新期北岳、南岳の3期に大別されています。古期北岳は約2万2千年前に活動を始め、約2千年間続いたようです。約1万1千年前からは新期の北岳が活動を始め、県内各地に軽石などの噴出物を積もらせました。なかでも霧島市の上野原遺跡は、9千5百年前の桜島(新期北岳)の火山灰に覆われていたことから、日本で最も古い集落だったことが特定できました。南岳の噴火は約4千5百

年前から始まったようで、現在も続いています。

歴史時代の噴火の記録は、708(和銅元)年が最古で、1471(文明3)年、1779(安永8)年、1914(大正3)年、1946(昭和21)年の噴火が有名です。なかでも1914(大正3)年の噴火では、山腹から流れ出した多量の溶岩によって大隅半島と陸続きになってしまいました。

現在、桜島の活動は比較的穏やかです。しかし、地殻変動の観測では、桜島周辺が現在も隆起を続けており、今後も溶岩流出を伴う大噴火が起こることが懸念されます。

